

(註2) 擦文文化遺跡のセトウルメント・ユニット等をはじめとする竪穴の分析については、いずれ後続の館報にて述べたいと考えている。

参考文献

- 赤沢 威 1967 「北海道十勝郡浦幌町十勝太遺跡調査報告」『人類学雑誌』第75巻第2号 10~25頁 日本人類学会
- 石橋次雄・木村方一・後藤秀彦 1974 『十勝太若月一第二次発掘調査一』 浦幌町教育委員会
- 上野秀一・羽賀憲二 1974 『札幌市文化財調査報告書』V 札幌市教育委員会
- 宇田川 洋 1980 「擦文文化」『北海道考古学講座』151~182頁 みやま書房
- 浦幌町教育委員会 1973 『十勝太古川・若月遺跡発掘調査概報—第一次発掘調査一』
- 大谷敏三・田村俊之 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』千歳市教育委員会
- 北構保男・石附喜三男編 1973 『伊茶仁遺跡』 北地文化研究会
- 後藤秀彦 1983 『十勝地域における擦文文化の調査』『考古学ジャーナル』No. 213 17~20頁 ニュー・サイエンス社

- 佐藤隆広 1980 『ホロナイポ遺跡』 枝幸町教育委員会
- 佐藤隆広 1981 『ホロナイポ遺跡』II 枝幸町教育委員会
- 高橋正勝 1974 「日ノ浜型住居址一二段の床をもつ五角形プランの住居址についてー」『北海道考古学』第10輯 77~88頁 北海道考古学会
- 田村俊之編 1985 『末広遺跡における考古学的調査(続)』千歳市教育委員会
- 藤本 強・宇田川 洋 1977 『岐阜第二遺跡』 常呂町教育委員会
- 藤本 強 1982 『擦文文化』教育社
- 堀 晓 1977 「7号竪穴」『岐阜第三遺跡』 36~39頁 東京大学文学部
- 前田 潮他 1972 「ワッカ遺跡」『常呂』 233~264頁 東京大学文学部
- 松田美砂子・村田良介 1981 「須藤遺跡」『斜里町文化財調査報告』I 斜里町教育委員会
- 峰山 巖・宮塚義人 1983 『おびらたかさご』 小平町教育委員会
- 山崎博信 1970 『紋穂内遺跡』 美深町教育委員会

十勝太若月遺跡出土の勾玉状土製品

後 藤 秀 彦

ここに紹介する資料は、1972~1974年の3年間にわたって浦幌町教育委員会が発掘調査した十勝太若月遺跡（北海道十勝郡浦幌町字下浦幌東5線南82番地所在）から出土したものである。資料は1974年の第3次調査の際、第21号住居跡の床面から発見されたものであるが、発掘調査報告書作成時には気が付かず、一土器片と考えていたので、報告書には記載していない。

十勝太若月遺跡は、浦幌十勝川（旧十勝川）の河口近くに発達した河岸段丘上に形成された十勝太遺跡群のほぼ中央に位置し、南に開いた馬蹄形の竪穴配置をもった擦文時代の集落跡である。発

掘調査では、このほかに縄文早期からアイヌ期にわたる一連の遺構・遺物が発見されたが、この中でも続縄文時代の後北C₁期の墳墓が多数発見されたことや擦文時代の火災に遭った住居跡が検出されたことは大きな成果であった。当資料も、こうした擦文住居跡中から発見されたものであるが、資料の少ない当該時代の装飾品の例として貴重であると考えられるので、ここに紹介するものである。

資料は、Fig.1に示したように、一見して勾玉状を呈したもので土製品である。この土製品は長さ39mm、幅28mm、厚さ9mmで、断面は勾玉と違っ

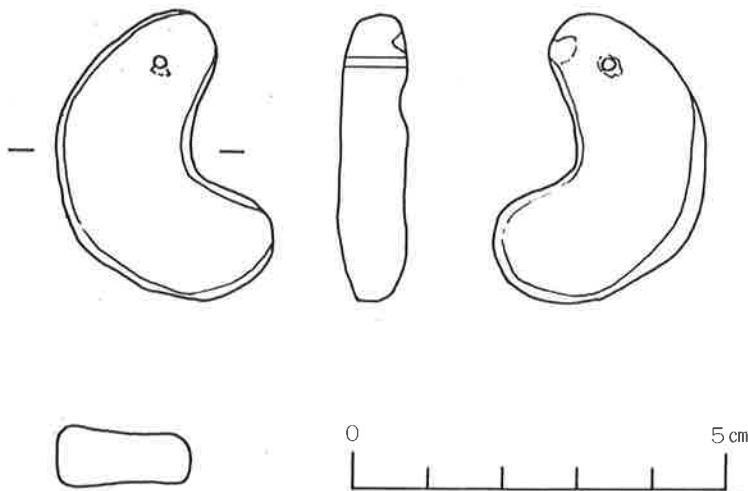


Fig. 1 十勝太若月遺跡出土の勾玉状土製品 (S=1/1)

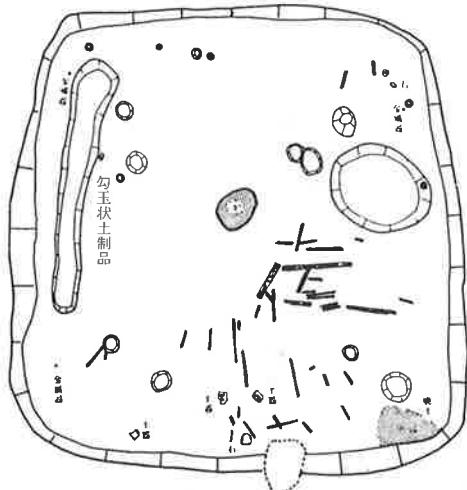


Fig. 2 十勝太若月遺跡第21号住居跡(石橋他、1975)

て丸味を帯び、むしろ扁平な形状で、やや凹凸があり、手づくねで製作したと考えられるものである。上部には径1mmの穿孔があつて貫通しておりここに紐を通して使用したことは明かである。資料の一部にはわずかに剥脱も見られるが、黄褐色を呈しており、全体として保存は良好である。

資料は、Fig. 2に示したように第21号住居跡の床面、トレンチ状のピットの脇から出土したもので、本住居跡からはほかに土器、刀子・針などの鉄製品が出土している。こうしたことから本資料が、第21号住居跡に伴なうもので、擦文時代に所属するものであることは明かである。

前述したように、擦文時代に属する装身具の例

は極めて少ないので実状である。前時代の縄繩文時代に管玉や丸玉、平玉などの装身具が多数発見されているのとは対照的である。こうしたことから、本資料が該期の精神文化の一端を示すものとして稀少価値をもつものであることは論を待たないものである。

さて、こうした擦文時代に属する装身具の資料としては恵庭市柏木川遺跡（高橋編、1971）Pit 77出土の土製丸玉3個と千歳市三角山D遺跡4号住居址（大谷、1978）付

近から出土した土製丸玉・勾玉状土製品が有名である。特に、後者の三角山D遺跡からは両者を合わせて34点が出土している。報告者は、一定の場所から集中して出土したことから「何らかの祭祀遺跡の可能性も考えられるが焼土やピットなどそれを例証する遺構は認められなかった」と、結んでいる。十勝太若月遺跡の場合、西壁に沿った細長いピットの脇で検出されたものであるが、類例も少ないので詳細は後日に委ねたいと思う。

（浦幌町郷土博物館学芸員）

引用文献

石橋次雄他（1975）『十勝太若月—第三次発掘調査一』

大谷敏三（1978）『4号竪穴住居址』『祝梅三角山D遺跡における考古学的調査』

高橋正勝編（1971）『柏木川』

1987年12月16日	印 刷
1987年12月20日	發 行
編 集 後 藤 秀 彦	
發行責任者 木 村 旭	
發行所 浦幌町郷土博物館	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1	
印刷所 大同出版紙業株式会社	
北海道帯広市西7条南6丁目	